

《研究ノート》

「ソクラテスのパラドクス」に関する若干の考察

——「知って悪を行う者は誰もいない」ということについて——

(昭和52年11月7日原稿受理)

塩 出 彰
(人文教室 倫理学)

目 次

1. 序
2. 『プロタゴラス』、『メノン』、『ゴルギアス』
3. アクラシアにおける「知識」の問題
——『国家』における一つの解答——
4. 結 論

1. 序

何が為すべき最善の事柄であるのかわかっていながら、しかもそうすることを防げる何等の外的障害もなく、自らそうしようとさえすれば行うことができるのに、自らの激情や快楽や苦痛や愛欲や恐怖などに負けて、最善とは思えないこと——その意味で悪いこと——を行ってしまうことが時としてある¹⁾というのは、プラトンの言う一般大衆ならずとも、我々の日常経験するところであろう。これに対して、プラトンは、その対話編の初期から後期にいたるまで一貫して「悪と知りながら、自らすすんで(ἐκών)そのようなことを行う者は誰もいない」ことを主張している²⁾。たとえば、『プロタゴラス』において、知識(ἐπιστήμη)は、人間を支配する力を持っており、いやしくもひとが善いことと悪いことを知ったならば、何かほかのものに屈服して、知識の命ずる以外の行為をするようなことは決してない、とソクラテスをして主張せしめている³⁾。

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』の中で、上のような事態を“ἀκρασία”(無抑制)と名づけている。(以下、本稿においては上の事態の名称として、このアリストテレスの命名を借用したい。)彼は上のような主張は「事柄の実際(τὰ φαινόμενα)」に抵触すると考え、彼自身の立場から、この問題の検討を行っている⁴⁾。人が時としてアクラシアに陥ることがあるということは、当時のエウリピデスの悲劇においても演じられており⁵⁾、上のソクラテスの主張は、当時の一般大衆にとっては、アリストテレスの言うように、事柄

1) cf. Prot. 352b-d.

2) たとえば Soph. 228c-d.; Phileb. 22b.; Tim. 86d-e, 87b; Nomoi V 734b, IV. 860d-e.

3) Prot. 352c.

4) Ar. E. N. VII.

5) 『メディア』(431B.C. 上演)、『ヒッポリュトス』(428 B.C. 上演)

の実際とは全く相容れないものと考えられたであろう。

このように、アクラシアが決して存し得ないという主張が誰もが直ちに認めるような自明のことではなく、むしろ事実と反するパラドキシカルな主張として一般に理解されていたとすれば、そこには十分な論拠がなければならない。本稿において、私は、プラトンの初期の対話編において、(1) アクラシアの存在の否定は、いかなる意味において、いかなる論拠をもって行われているのか、また (2) その論拠は十分なものか否か、十分でないとしたら、いかなる論拠が必要であるのか、そして (3) そのような十分な論拠をプラトンは与え得るものであるか否か、与え得たとすれば、そのような論拠のもとに成立するアクラシアの否定はいかなる意味であるか、を初期の対話編中アクラシアの問題が論じられている『プロタゴラス』・『メノン』・『ゴルギアス』および中期の『国家』を手がかりに若干の検討を試みたい。

2. 『プロタゴラス』、『メノン』、『ゴルギアス』

『プロタゴラス』においては、351b~358e にかけて、アクラシアに人が陥ることがあると主張する大衆の見解が検討を加えられている。大衆の見解は次の三点に要約することができる。

(1): 人は何等かの原理に照して最善の事柄を知り、かつ自分が行うことが悪いことであることを知っている。

(2): 人が最善の事柄を行うことをも、悪い事柄を行わないで済ますことをも防げるような外的障害や強制力は何も存しない。

(3): (1) および (2) にもかかわらず、快楽や苦痛に負けて、人は悪い事柄の方を行ってしまうことがしばしばある。

この大衆の見解に対して、プラトンは (3) の事態が (1) の事態と全く相容れないものであること、つまり (3) の事態の成立そのものが、人が善・悪について無知 (*ἀμαθία*) であることを意味していることを示すことによって、大衆の主張が矛盾した馬鹿げた主張であることを証明しようとする。

この大衆の見解の吟味に先立って、プラトンは、ソクラテスと大衆との仮空の対話を通して、彼等の価値の原理が快楽主義であることを確認する。それによれば、快楽こそが善であり、苦痛こそが悪である。行為の道徳的価値は、それが行為者にもたらす快楽と苦痛に照して定められる¹⁾。

この快楽主義に基づいて、「快=善、苦=悪」という等式が成り立つとすれば、アクラシアに関する大衆の主張は次のような二つの形に定式化することができる。

[I]: 「悪と知りながら、する必要もないのに、善に打ち負かされて (*ἡττώμενος ὑπὸ τῶν ἀγαθῶν*), 悪を行う者がいる²⁾

[II]: 「人間は苦しい事柄を、それが苦しい事柄であると知りながら、快い事柄に負け

1) Prot. 351b-e; 353c~354e.

2) Prot. 355d.

て、それも明らかに勝つだけの価値のない快い事柄に負けて (*ἡττώμενος ὑπὸ τῶν ἡδέων, δῆλον ὅτι ἀναξίων ὄντων νικᾶν*), その苦しい事柄を行うものだ。¹⁾

プラトンによれば、このように定式化してみれば、大衆の主張がいかに馬鹿げたものかは明白である。この点が 355a 以下で明らかにされる。

355d の説明によれば、定式〔I〕の「善に打ち負かされて (悪を行う)」とは、「善が、心の中で、悪に打ち勝つだけの価値がないこと」²⁾ である。この打ち勝つだけの価値があるとかないとかいうのは、善と悪——したがって快と苦——の両者の間の量的な大小・多寡の関係を意味する。それ故、「善が、心の中で、悪に打ち勝つだけの価値がない」ということは、行為者の目から見てその行為の持つ善の総量が悪の総量よりも小さいことを意味する³⁾。また、大衆の最初の主張である「快に負けて、悪を行う」ということが、行為の持つ快に誘惑されて、それを得る代償に悪を行うということである以上、この定式〔I〕における「善に打ち負かされて、悪をなす」ということの意味は、それを得んがために人が悪を行ったところの、その行為から結果する善の総量が、その行為から結果する悪の総量よりも小さいことに他ならない。

この定式〔I〕で確認されたことが、次いで定式〔II〕に当てはめられる。すなわち、〔II〕における「勝つだけの価値のない快に負けて、苦しい事柄を行う」ということの意味は、〔I〕について語られたことから、明らかにその行為に含まれる快に惹かれて、それを得るために、そこから得られる快の総量よりも大きな苦の総量を結果するような行為を行うことである。このような行為は、快楽主義の原理に照せば、明らかに過つた行為である。このような過ちを犯さないためには、すなわち行為における快・苦の選択に過ちを犯さないで、可能な行為の中で快の総量が苦の総量を最も多く上回るような行為を常に選ぶ——ここに人間の「幸福 (*τὸ εὖ πράττειν*)」がかかっている⁴⁾——ためには、行為に直接的・間接的に含まれる快・苦の測定において決して誤りを犯さないようにすることが何よりも重要である。しかし「目に見えるがままの現象 (*τὸ φαινόμενον*)」は我々を惑わせるだけであって、快・苦について「真実 (*τὸ ἀληθές*)」を教えない。快・苦を常に正しく計るためには、一つの知識 (*ἐπιστήμη*)、計量術 (*ἡ μετρονική τέχνη*) が必要不可欠である。〔ここから、ソクラテスは更に次のように推論を進める。〕逆に、行為において過ちを犯すこと、すなわち快・苦の選択において過ちを犯すことは、行為に含まれる快・苦の計量を誤ることであり、このことは直ちに計量の技術——知識——の欠除を意味する。知識の欠除とは無知 (*ἀμαθία*) に他ならない。したがって、定式〔II〕における、人が「勝つだけの価値のない快い事柄に負けて、苦しい事柄を行う」という過ちは、彼がその行為に含まれる快・苦の総量の計量比較において誤りを犯したこと、すなわちその行為が全体として快い行為であるのか、苦しい行為であるのかについて「真実」を知らないことを示すものである。

以上の通りであるとすれば、〔II〕は「人間は苦しい事柄を、それが苦しい事柄である

1) Prot. 355e-356a.

2) Prot. 355d3~6.

3) Prot. 356a-c.

4) Prot. 356d, 357a-b.

ことを知りながらも、それを苦しい事柄であることを知らないで、その苦しい事柄を行うものだ」という、明らかな矛盾を含む主張になる。この同じことは当然〔I〕にも当てはまる。かくして、人間が悪を行うのは、その行為の持つ善・悪の量的差違に無知なるがため、つまり行為の道徳的価値に無知なるがためであり、「知りながら、その必要もないのに、快樂に負けて、悪を行う」ということは、あり得ることとして否定されねばならない。

以上見たように、この議論の要は、快・苦の正しい選択には計量術という知識が必要不可欠であるということから、逆に快・苦の選択を過つことは、この知識の欠除、すなわち無知を意味するという結論を導出することにあつた。しかし、このような結論が導き出されるためには、計量術の知識の存在が快・苦の正しい選択、すなわち最も快い行為を正しく選ぶための唯一の必要かつ十分な条件であることが予め示されていなければならない。では、このことは十分な論拠をもって示されているのであろうか。答えは“否”である。

既に見たように、行為における快・苦の選択とその計量術の関係が論じられた 356a 以下の議論において証明されていたのは、計量術が快・苦の正しい選択のための必要不可欠の条件であることだけであつた。計量術によって可能な諸々の行為の中で最も多く快の剰余をもたらす行為を知ったとしても、この知識の教える最善の事柄を常に我々が実際に欲して選択し行為するとは限らないのである。たとえば、直接的な快樂の大きさにひかれて、人生全体を通して見れば、苦の総量がまさるような事柄を、そうとわかっていながら、自ら欲して行うことの可能性は否定され得ない。したがって、快・苦の選択を誤って悪を行ったという事実から、直ちにそれが計量術の知識の欠除・無知にのみ原因するという上記の結論は論理的には導出され得ないものである。そのためには、行為への欲求・選択が常に計量術が最も快いと知らせるものに対してのみ働くこと、すなわち欲求が常に合理的なものであることが前提されなければならない。

確かに人間が自らの幸福 (*eudaimonia*) を自らの究極的善と考えており、そのような善への願望が万人に存していること、諸々の善きものが善きものであるのは、この究極的善に有益であると考えられるが故であることは、プラトンも一般大衆もともに認めるところである。しかし、この事実もまた、直ちに選択さるべき具体的な行為に対する欲求が常に究極的善への願望に——少くとも形式的には——一致することを保証するものではない。

このようにアクラシアの可能性が否定されるためには、個々の行為の選択において、人が常に人生全体を見通した上で最善と見做されたものを欲求することが、十分な論拠をもって示されなければならない。それにもかかわらず、プラトンはこの点に関して全く触れることなく、アクラシアはあり得ないと結論していた。この事実は、プラトンが、具体的次元において可能な行為の中で最善と見做されたものが常に欲求されることを、「よく生きること」への万人共通の願望と同じく、明言する必要のない当然の前提と考えていることを示すものと考えられる。このことは、アクラシア否定の議論が要約的に語られる 358b-d において、「善い事柄よりも悪いと信じるもの (*τὰτα δ' οἶεται κακὰ εἶναι*) のほうへ、自分から進んで (*ἐκόν*) 行こうとするようなことは、もともと人間の本性 (*ἀνθρώπου*

φύσις) にはない¹⁾ ことが主張されていることによって確認できる。

以上の通りであるとすれば、アクラシアの可能性を否定するプラトンの議論は、その前提として、具体的次元で人が常に最善と見做されたものを欲求するということ——換言すれば、具体的行為への欲求が、万人共通に存する「よく生きること」への願望に常に少くとも形式的には一致すること、究極的善に対して働く願望と、具体的行為において働く欲求とが一元的であること——を補うことによるのみ完全なものとなるのである。しかし、大衆の主張の眼目は、まさにこの前提の事実の否定、すなわち具体的な選択の場で、人が自らの情念にかられて、時として（「よく生きること」にとって）最善と思われるものではなく、悪いことだと思われるものを欲求し、行うことがあるという点にあった。我々の日常の経験もこのような事実を確認しているように思われる。とすれば、『プロタゴラス』におけるプラトンの議論は、大衆の見解に対する反証と見る限り、何事をも反証も論証もしていないことになる。単に相手の主張を否定し、自らの考えを独断的に主張しているだけのことである。同様のことが『メノン』、『ゴルギアス』においても確認できる。

また『プロタゴラス』におけるアクラシアの否定が、上記のような前提のもとに成立するものである以上、その主張は広く知識一般について成立するものであり、大衆の見解とは全く相容れない主張であると言わねばならない。

『メノン』においては、メノンの与えた「徳とは善きものを欲求して、これを獲得する能力があることである²⁾」という定義の是非をめぐって、77b-78bにおいて、“それを悪いことと知っていながら、その悪い事柄を欲するような者は誰もいないのであって、人は全て善いと本当に知られたもの、もしくはそう思われたものを欲している”ということが主張されている。その論拠は、“自らの幸福を万人は究極的な善として望んでいるのであって、自らが不幸になることを望む者は誰もいない。ところで、悪い事柄とは自らにとって有害なもののことであり、それを行うとは悪しき事柄を自らのものにするものである。それは自らを不幸にすることに他ならない。したがって、それと知りながら、悪い事柄を欲する者は誰もいない。”³⁾ というものである。このように、『メノン』においても、『プロタゴラス』と同様に、自らの幸福に対する願望が万人に存すること、および具体的行為における欲求がこの願望に常に形式的には一致していることが前提となっているのである。

『ゴルギアス』においては、「不正を行うことを望む者は誰もいないのであり、不正を行う者は全て心ならずも (ἀκων) それを行うのである。」⁴⁾ と主張されている。この主張の可否については、467c~468e においてソクラテスとポロスの間で議論されている。そこにおいても、その論拠は「行為する者は善——人間にとっての究極的な善——のために（なるとして）全て行為を行っている⁵⁾」ということにあり、既に見た、『プロタゴラス』、『メノン』同様、究極的・自体的に善なるものに有益であるという意味で善いと見做され

1) Prot. 358c-d.
2) Menon 77b.
3) Menon 77e-78b.
4) Gorg. 509e.
5) cf. Gorg. 468b.

るものが常に欲求されて行為されることが前提となっていることが確認されるのである。但し、『ゴルギアス』においては、行われた行為が自らすすんで(ἐκόν)行われたのか、それとも心ならずも(ἄκον)行われたのかは、善いと思って行われたその行為が、人間にとっての本当の究極的善(真の幸福)——それは魂の本来の秩序(ὁ οὐκείος κόσμος)に求められている¹⁾——に善いものであるか否かによって、すなわち、何が人間にとって本当の究極的善であるかが本当に知られたならば、必ずそれに対して働いたであろう願望——いわば本当の願望——にかなったものであるか否かによって、決定されることが主張されており、この点に関しては、行為に当って実際に何が究極的善として願望され、欲求されたかはかかわりないものとされている。この点において、現実に関心した願望・欲求に照して、行為が自らすすんで行われたか否かが定められる『プロタゴラス』とは大きく異なっていると言わねばならない。

3. アクラシアにおける「知識」の問題

—『国家』における一つの解答—

これまでの考察から明らかなように、アクラシアの可能性を否定するプラトンの議論の前提は、究極的善(自らの幸福)に対する願望が万人に存しており、人はそのような善——それが各々にいかなるものと理解されているかにかかわりなく——に有益なものと考えられるものを善きものと見做して、行為しようと常に欲求するということであった。それ故、この前提に立つ限り、人間にとって、あることが自らにとって悪いものであることを知りながらであれ、単にそう思っているだけであり、いずれの場合もそれを行為しようと欲することは全く不可能である。このように、その善しと告げることによって欲求が決して働き得ないという点においては、知識も単なる臆見も何の違もないのである。これはプラトンにとっていささか奇妙な事態と言わねばならないように思われる。

プラトンの初期の対話編においては、徳が究極的には何等かの知識に収斂される可能性が追求されており、これをめぐる問題が対話編のテーマをなしている。そして、このような徳がそこに収斂されるべき知識こそが、愛知の営みにおいて追求されるべき知恵の内実をなすものであった。この愛知の営みにおいては、単に知っていると思っただけのことと本当に知っていることとは厳密に区別されねばならなかった。ところで、「知って悪を自らすすんで行う者は誰もいない」という主張は、上のような意味での「徳とは知識である」という基本的主張からの直接的帰結である。したがって、この「知って悪を自らすすんで行う者は誰もいない」という事態も、愛知において求められる厳密な意味での知識においてこそ成立すべきものであって、それが知識であると臆見であるとを問わず、先に述べたような前提のもとに広く知識一般において成立するとすれば、大衆にとってのみならず、プラトンにとってもパラドキシカルなことだと言わねばならないであろう。

このように、「知って悪を自らすすんで行う者は誰もいない」という主張がプラトンにとって整合的な主張であるためには、厳密な意味の知識が成立した場合にのみ、この主張

1) Gorg. 506d-508a.

の適用が限られ、それ以外の場合には人がアクラシアに陥る可能性を認めることが必要である。既に述べたように、『ゴルギアス』においては、「不正を行うことを望むものは誰もいないのであり、不正を行う者は全て心ならずもそれを行うのである」ということが、人間にとっての究極的善が何であるかが本当に知られた場合にのみ現実の願望となるところの“本当の願望”に照して主張されていた。このことは、依然『プロタゴラス』と同様のことが前提となっているにもかかわらず、ここでプラトンがアクラシアの問題を厳密な意味での知識において把えようとしていることを示すものである。このような考えは、中期の『国家』において、更にはっきりと展開されているのである。この点を最後に簡単に確認しておこう。

『国家』において先ず注目すべき点は、欲求が、それ自身の固有の機能をもったものとして把えられ、事の是非善悪を判別する理知とははっきり区別されていることである。欲求は、常に理知によって善しとされたものを対象として働くわけではないのである¹⁾。したがって、理知によって悪いと判断されたことが欲求され行われることの可能性は当然認められねばならない。レオンティオスに関する逸話はこのことを如実に物語っている²⁾。

このように『国家』においては、魂は各々固有の機能を持った諸部分から成るところの、いわば共同体として理解されている。初期の対話編において問われてきた徳の問題は、これら諸部分の秩序の問題として解答を与えられることになる。プラトンによれば、魂は「欲望的部分 (τὸ ἐπιθυμητικόν)」、³⁾「氣概の部分 (τὸ θυμοειδές)」、⁴⁾「理知的部分 (τὸ λογιστικόν)」の三つの部分から構成されている。知恵は理知的部分固有の徳であり、勇氣は氣概の部分固有の徳である。理知的部分が魂全体を本来支配するものであり、他の部分はこれに協力・服従しなければならないという点で三つの部分の間に意見の一致を見た時、そこに節制の徳が見出される。また、これらの諸部分が各々自らの職分を果して、全体の調和が生ずる時、そこに正義の徳が存するのである³⁾。ここに魂の最善のあり方・本来の秩序があり、真の幸福もここにおいてはじめて見出されるのである。この魂のよき秩序においては、欲求が理知の命ずるところに背いて、悪しきものを欲することは原理的に不可能である。

それでは、このような魂の秩序は、そして知恵はいかにして達成されるのであろうか。プラトンによれば、知恵は、魂が肉体と不可分の関係にある感覚の助けを一切かりことなく、純粹に思惟の働きを通してのみとらえる真実在たるイデアの世界を把握することによってのみ得られる。人間は無知の知を媒介として、万人共通の自らの生を「よく生きること」への願望によって、このような知恵の探究 (φιλοσοφία) へと駆りたてられるものである⁴⁾ とともに、それにもかかわらず魂と肉体の合成的存在である人間にとって、このような営みは生得的に可能なものではない。そのためには、先ず幼時からの音楽・文芸 (μουσική) と体育術 (γυμναστική) を通しての訓育が行われねばならない。この訓育によって、理知的部分は真に愛知的なものとなり、氣概の部分は理知的部分のよき協力者となり、

1) Rp. IV. 436a-441c.

2) Rp. IV. 439e-440a.

3) Rp. IV. 441d-443e.

4) cf. Symp. 205a.

欲求の部分をして従順な服従者たらしめるのである¹⁾。魂の内にこのような秩序——知恵にではなく、真なる臆見に基く「民衆的徳」の秩序²⁾——が形成された時はじめて、魂の理知的部分はその思惟を、諸々の感覚的・肉体的なものに煩わされることなく、純粹にそれだけで働かせて、真實在へと迫ることができるのである。このようにして魂の理知的部分が知恵に到達した時、魂は未だ不安定な「民衆的徳」の段階を超えて、真正の徳を得、その調和的秩序は、何ものによっても決しておびやかされることのない、最も安定した永続的なものとなるのである。したがって、先に述べたように、ここにおいては理知的部分が善しとして命ずるところに魂の他の部分が背くこと、すなわち「悪と知って、自らそれを行う」ということは絶対的に不可能なものとなるのである。

このように人間にとって、愛知のためのこのようなプロセスと魂のあり方を必要とさせ、更にはアクラシアを不可能ならしめる客観的根拠は、存在のイデア論的構造である。愛知において求められる知こそが、徳がそこに収斂さるべき知識であり、このような知識においてこそ「知って自ら進んで悪を行う者は誰もいない」という主張が成立すべきであるという課題は、存在と価値と認識のイデア論的理解によってはじめて十分な論拠をもって果されたと言えよう。

4. 結 論

以上の論究によって、以下のことが結論されよう。

1. 『プロタゴラス』、『メノン』、『ゴルギアス』から知られる限り、プラトン初期における「悪と知って、自らすすんでそれを行う者は誰もいない」という主張は、万人に存する自らの究極的善への願望と具体的欲求が常に形式的に一致することを前提としている。
2. これらの議論が、大衆の主張に対する何等かの反証であるとするれば、上記のような前提をたてている点で、論点先取の誤ちを犯している。
3. 上のような前提に基く主張である限り、上記のプラトンの主張は広く知識一般について成り立つことが含意されており、大衆の見解とは真向うから対立するものである。
4. この主張が広く知識一般について成り立つということは、プラトン自身にとってもパラドキシカルな主張である。プラトン自身にとって整合的かつ論拠のある主張となるためには、愛知において求められる厳密な知識においてのみはじめて十分な意味を持つような主張として把え直されねばならない。
4. このことは『ゴルギアス』において示唆され、『国家』において十分に展開された。このことを可能にしたものは、魂の三分説とイデア論である。
5. 『国家』において、「悪と知って、それを自らすすんで行う者は誰もいない」という主張が成立するのは、厳密な意味での知識が成立した場合のみである。それ以外の広義の知識に関しては、悪と知って、しかもそれを自らすすんで行う可能性を排除するものは何もない。したがって、ここにおいてはプラトンの見解と大衆の見解は何等矛盾するもので

1) Rp. II. 376e-III 412b. esp. 401b-403c, 410b-412a.

2) cf. Rp. VI. 500d; IV. 429b-c, III. 389d-e; Phaed. 69a-c., Phaed. 82a-c.

はなく、両立しうるのである。この意味で、ここにおいては「ソクラテスのパラドクス」はもはやパラドクスではないのである。